

まちづくりネットワークえひめ

# 舞 とうん

VOL 43



松山市三津浜 でびら干し

## 特 地域を担う人材育成 —まちづくり塾から— 集

『まちづくりネットワーク』

- 「水軍交流会」 玖珠町を訪ねて
- キーワードは“塾”…
- 夢はまだまだ始まったばかり
- 天才は忘れた頃に飛んでいた！

離島地域の明るい未来のために…………… 愛媛県離島振興協議会長／木下 良一 …………… 1

特 『地域を担う人材育成 一まちづくり塾から一』 集

一まちづくりネットワーク一

- 「水軍交流会」玖珠町を訪ねて……………宮窪 町／村上 利雄…………… 2
- キーワードは“塾” ……………川内 町／近藤 照雄…………… 4
- 夢はまだまだ始まったばかり……………河辺 村／樽井 優…………… 6
- 天才は忘れた頃に飛んでいた！……………八幡浜市／緒方健太郎…………… 8

論談一まちづくり一

まちづくりから見えること「源吾郎の降る村」……………長野県飯田市／高橋 寛治……………10

キラリ光るまち

みんなでつくろう住みよいむらを！……………大分県三光村／相良 卓紀……………12

レポート

- 地域づくり西日本交流会議 …………… 14
- まちづくり草の根文化講演会 …………… 15
- 地域づくり交流研修 …………… 16
- 平成六年度「ふるさと再発見・創造塾」活動報告 …………… 18

ふれあい広場

リレーでちょっとーク（大西吉美・矢野クニ子）……………20

地域を生きる

マイタウン マイフレンド ……………中川 義博……………22

風の便りから

四つのネットワークで生きる ……………若松 進一……………24

Information

- 媛のくにフラッシュ……………26
- 〈朝倉村・柳谷村・愛媛県〉
- えひめ地域づくり研究会議（お知らせ）

特集 “地域を担う人材育成

一まちづくり塾から一”

今日、個性的で魅力ある地域づくりのため、さまざまな活動が展開されています。

その活動にあたって、「人・モノ・情報のネットワーク」が重要視されているのはいうまでもありません。それは、まちづくりを進めていく上で、そのネットワークを活かしながら感性を磨き、お互いが刺激しあうことにより自己を高め、創造力や新たな意欲などの醸成に繋がってくるものと思われまます。

県内のまちづくり活動グループにおいても、各種のイベントや学習会など、相互にネットワークを活かしながらお互いが学び、高まりながらふるさとがやすらぎとうるおいに満ち、誇れる地域を目指し、懸命に取り組む姿が見受けられます。

そこで、特集のメインテーマ「地域を担う人材育成一まちづくり塾から一」の第三集として、それぞれのまちづくり塾やグループで様々な機会を捉え、ネットワークの形成やふるさとづくりが、どのような活動を通して進められているのかを探るため、今号ではサブテーマ『まちづくりネットワーク』として編集することにいたしました。

表紙の言葉

三津地区で、「平成船手組」の町を博物館にというイベントに参加しました。

昔から港町で栄えた三津の風情ある町並みをあらためて認識しました。

渡し舟横では名物のでびらの作業を忙しうにしています。

柳原 あや子



松山市三津浜 でびら干し

# 離島地域の 明るい未来のために

愛媛県離島振興協議会

会長  
木下良一



皆さんは、県内に人が住む島がいくつあるかご存じでしょうか。人が住む島は、東は新居浜市大島から南は津島町竹ヶ島まで、三十六島あります。このうち、離島振興法の「離島」には、松山市の興居島を除く三十五の島が指定されています。

これらの離島を有する県内十九の市町村長と議長で構成する団体が愛媛県離島振興協議会で、各種の離島振興事業の円滑な推進と会

員相互の連絡協調の場として活動しています。

離島地域のまちづくりは、これまで離島振興法により、本土とのハンディキャップを解消するため、道路・港湾・漁港等の生活・生産基盤の整備を重点に取り組み、近年は、これらに加え、簡易水道、公共下水道、集落排水等、生活環境面の整備が進み、島民の暮らしも格段に向上して参りました。

しかし、離島地域は本土に比べ十年先をいくといわれる高齢化の進行、進学・就職による若年者の島外流出と、たいへん厳しい現実があります。これらの課題を解決するため、現在、平成四年度に策定された愛媛県離島振興計画に沿って、「二十一世紀に向け若者が定住できる魅力ある島づくり」を基本目標として、ハード・ソフト両面から離島地域の振興に取り組んでいるところです。

若者の定住に関しては、既に、南予の真珠やハマチ養殖の盛んな島や、伊予柑栽培が安定している

中予の島では、後継者が育っています。また、離島青年協議会という離島の地域づくりに取り組む青年たちの団体も、活発に活動するなどの事例も見受けられますが、まだまだ少数で、ほとんどの島では若者は減っています。

若者の定住が進んだ事例から考えられる定住の要件としては、  
○居住環境の整備

○安定的な就業の場の確保

○比較的近くに都市機能を享受できる拠点都市があること

○気軽に交流できる仲間の存在などが挙げられますが、さらに付け加えるとすれば、県内で後継者のいる地域では、家庭や地域で若者を育成し、能力を活かすシステムが、歴史の中で生活習慣として形成されていると思われ、若者の定住意識を醸成する家庭や地域の役割も重要と考えられます。

もちろん、地域づくりを日々実践する行政の役割が重要であることは言うまでもありません。

私は、行政の最終目標は、そこに住む全ての人々が、いつまでも

安心して住み続けたいと願う幸せな暮らしを、安定的に確保することだと考えています。特に、本県離島地域の究極の目標は、四方を海に囲まれているという離島のハンディキャップの解消、すなわち橋等で本土と結ばれることです。

幸い、平成十年度には西瀬戸自動車道が開通の見込みであり、また、このルート上にはない島を結ぶ架橋構想もあり、一部地域では工事が進んでいます。本土と陸続きになることは、離島の課題の多くを一度に解決することになるので、今後とも当協議会では最重点項目の一つとして、架橋の早期実現を強力に推進して参りたいと考えています。

このほか離島地域では、医療・福祉の充実、観光開発、教育・文化の振興等、多くの課題を抱えています。当協議会の活動を通じて、関係市町村と連携をとりつつ一致協力して、離島地域の明るい未来のために、引き続き全力を挙げて、これらの課題の解決に取り組んで参りたいと考えています。



先日二日間の日程で、宮窪町民百三十二名が、大分県玖珠町を訪問し、水軍交流会を行った。これは、昨年玖珠町より百九十七名が、水軍のグッズを求めて当町を訪れ

たことに始まる。

慶長六年に玖珠町の「豊後森」に移封され、一万四千石の大名になった村上水軍来島氏の末裔たちが四百年を経て、初めて水軍に関する伝統文化の交流を目的とし、当町に水軍交流会を求めてきた。そして今年、当町が玖珠町を訪ねることになった。

早朝に出発した一行は、夕方になって、水軍が築いた豊後森大通りに着いた。初めて見る豊後森の大通りに感激。私達一行は、先頭に鎧武者を並べ、次には献上の干しだこを吊し、その後へ陣羽織姿で、水軍旗を棚引かせながら行進を始める。更に、ホラ貝を吹きドラを鳴らす。現代の「能島水軍行列」は、静かな町に大事件を起こしたようだ。通りに人垣ができ、



途中の広場に差し掛かると、久留島水軍太鼓の歓迎を受けると共に、ミス豊後森に着物姿で静かに誘導して頂く。また、通りに仕掛けられた広報無線で詩を読むように、豊後森の紹介や歓迎の言葉が流れる等、心憎いまでの演出である。次に、横町から無形文化財の山路踊りが出での歓迎。行列が進み、拍手が増す。熱き思いを感じながら行列も終わりが近づき、過去の歴史文化を共有する者だけが分かち合うことのできる感動の一時を味わった。

水軍交流会の会場は、かつて水軍が住居を構えていたという今の「久留島庭園」で、それを利用した屋外ステージが、魅力あるものに仕上がっていた。薄暗くなつてステージがライトアップされ、両町の交流会が始まった。交流会を仕掛けた両会長（水軍ふるさと会・森軒先市実行委員会）、両町長のあいさつの後、当町の「お神楽」を披露した。これは、水先案内とか、悪魔払いの意味が込められている。宮窪戸代地区の伝統行

事で、「チャンカチャンカ」とリズムカルに舞うのが特徴である。六百人からの拍手で会場を大いに沸かせた。次に、庭園上の末広神社に特設されたBステージから、ギター演奏が始まり、ライトで浮かぶ高いステージは、空の上から音楽が流れてくるような、ロマンチックな雰囲気であった。また、所どころにかがり火が焚かれ、サイドにはイルミネーションで両町のマークが輝き、宮窪の字も浮かんでいた。

次は、当町の「子供能島水軍太鼓」の出演である。ホラ貝を吹きバチを打ち込む音も見事に合っており、響く太鼓の音は、観客を魅了したようだ。この日のために練習を積み重ねてきただけに、「見事にやってのけた」感がし、ホッとした。つなぎに入れるギターの音が、静寂を呼び、さらに玖珠町の「子供久留島水軍太鼓」の演奏が始まった。

観客広場では、芝生の上で焼き肉パーティーが盛り上がり、立ちのぼる煙が、電灯の光を浴びて幻



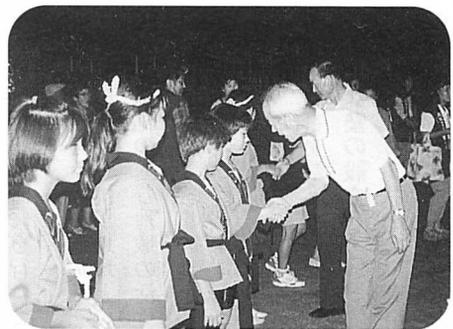
能島水軍行列

想的である。夜も段々と更け、会食もお開きの時間が来たが、参加者はご機嫌で、終わるのを惜しんでいるようだ。フィナーレは、参加者全員による玖珠町の盆踊り。玖珠町で知り合った人達に踊りを教えて頂き、輪になって踊った。初めは、小さな輪であったが、次々に人が集まり、大きな輪へ広がっていく。本当にこの人達といつまでも踊っていたいと思った。昨年は、当町で交流会をし、そして今、玖珠町で大歓迎を受けている。おそらく手作りであるパーベキュー用（七厘）等の住民から借り受け

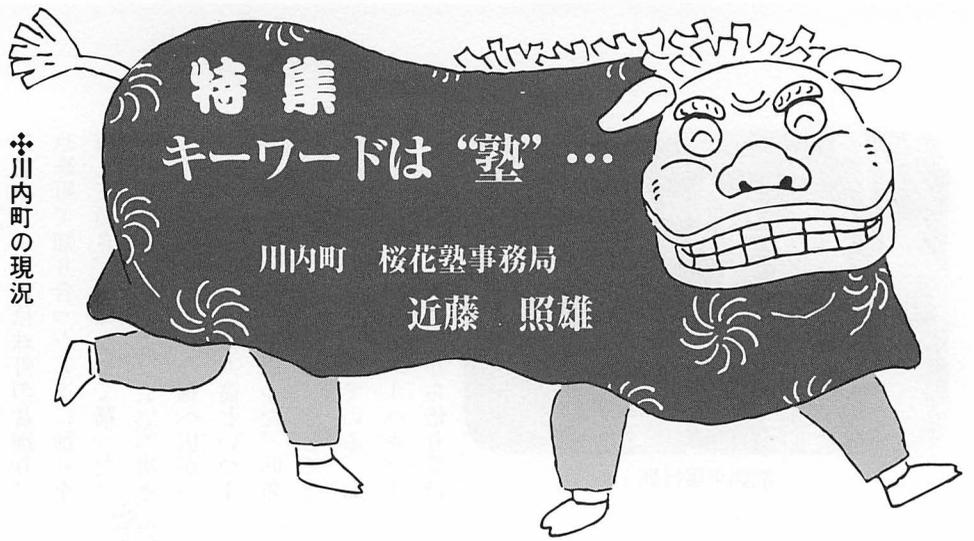
や六百人収容の会場設営の飾り付けなどは、大変な労力が必要だったのではないかと思う。交流会に望むに当たり、両町の打ち合わせは大まかに言い、「当日をお楽しみに」ということにした。おそれなく、私たちが予想外の歓迎に感激することを彼らは予測していたのである。それに、多くのボランティアの方々、そして地域の協力がなければできないことだと思ふ。「奉仕する行為」の行使しかないのである。行事の趣旨を初めから理解してくれる人もいるし、最後まで理解してくれない人もいるだろう。ボランティアは強制ではなく、先ず、理解によって協力が得られるのではないか。また、ボランティア活動は、純粹に取り組まなければならぬ。そして、その行為が感動を与え、また、ボランティアの輪も広がっていくと思う。そのことを理解している仕掛人たちは、意気に感じ、体力の限界まで動くことを惜しまない。玖珠町の森軒先市実行委員会は、早くから今日の交流会の準備をされており、昨

年の交流会を記念して「大島石」で金太郎・桃太郎の彫刻（宮内宏作）二体を通りと公園に据え、宮窪町のPRを図っていたのだ。大分県は「村おこし」の先進地であるだけに、心憎い仕掛けをするなと思った。そして、当町の鎧を着てドラを鳴らしての演出進により、交流会の人場券を求める住民で混雑が起こり、二百団体のボランティア活動の協力を得たという。水軍交流会は両町のエネルギーが重なり合って成功したと言える。しかし、この水軍交流会について、両町から来年の話は出てこなかった。それは、続けて同じことを行っても無意味であることを知っているからである。玖珠町は、高速道路が出来ようとしている。そして当町は、瀬戸内海大橋の建設が進んでいる。両町とも通過点にならないために努力をしなければならぬ共通の悩みがある。玖珠町は、それを打破するために歴史を訪ね「海の町」宮窪町へ。当町は、水軍文化を求めて「山の町」玖珠町へ。それが

この交流を実現したと言える。今後、両町の交流の方向性は分らないが、様々な自発性を期待したい。そして私自身も感動を与えてくれたこの町を再度訪れ、隅々まで知りたいと思う。また将来、共通する歴史遺産を持つ両町が協力し合って発展することを願っている。最後に、この「水軍交流会」を切っ掛けに、今後、宮窪町と玖珠町がこのネットワークを大切にしてお互いに学び合い、刺激し合うことで、自分たちの町をもう一度、見つめ直していきたいと思っている。



水軍交流会



### ※川内町の現況

川内町は、愛媛県のほぼ中央部、松山平野の東に位置し、北・西部を温泉郡重信町、東部を周桑郡丹原町、南部を上浮穴郡久万町、面

河村に接する面積一〇・八六km<sup>2</sup>の自然環境に恵まれた、松山市の近郊農村、郊外住宅地域であり、内陸工業や流通産業も盛んな町です。

人口は、大正から昭和の終戦時まではほぼ一万人で推移し、昭和二十五年に約一万二千人となる。その後、徐々に減少していったが、昭和五十年の約九千人を下限に再び上昇に転じ、平成六年十一月一日現在で一万六百人強となっています。

今後の川内町にかかる諸条件を見ると、今年十一月十六日には四国縦貫自動車道及び川内インターチェンジが開設され、また国道十一号バイパス等の道路整備により、松山平野の東玄関、陸上交通の要衝としての位置付けはますます高

まるとともに、工業・流通団地の整備等により経済活動が活発となり、人口の増加も見込まれることから、都市化の進展が予想されます。

では、こうした発展を約束された町に「まちおこし」が必要なのでしょうか。まちづくり塾が必要なのでしょうか？

私は必要だと考えています。目に見えるモノ（ハード）は着実に整備され、見た目にも発展を実感できるかもしれませんが、問題はその中身（ソフト）、つまり人材とか文化とか、あるいは人の笑顔ではないでしょうか。

まちづくりを一つの製造業として捉えるならば、ハードはあくまで原材料にしか過ぎず、「ひと」が知恵を出し、設計し、機械をつくり、そして原材料を使って加工・製造するのだと思います。「ひと」と「づくりを行う一つの手法」として、塾があるのではないのでしょうか。

### ※川内町桜花塾

私達、川内町桜花塾は平成元年



第3回滑川ためとも祭り

十二月に町の呼びかけで「川内町の二十世紀を担う人材育成」という名目で町内の各界の若者を集めて設立されました。

当初は、地域資源の掘り起こしを始め、学習・研修を行ってきました。

そんな中で、滑川地域という過疎と高齢化の進む地域の活性化を目指し、源為朝終焉の地という伝説を活かして、「滑川ためとも祭り」というイベントを開催し、今年で三回目を数えています。

### ※新たな塾の設立

そんな活動の中から、滑川在住の桜花塾生をリーダーとした「滑

川ふるさと塾」が誕生し、滑川区の若者によるまちおこし活動が展開されています。

また、桜花塾の今年の活動の一つである「農村と都市部の交流拠点づくり」について学習する中から、井内という地区の田んぼで松山の若者達に米（もち米）づくりを体験して頂きました。十月末には収穫祭なるイベントも実施しました。これは、都市部住民との交流を通じて、これからの農業の在り方を探ろうとするものです。

加えて、井内在住の桜花塾生もまた、井内の活性化を地域住民とともに考えるために「井内愛桜会」



井内お田植祭

というまちづくりグループを結成しました。来年度より本格的に活動を展開すること、桜花塾としても協力を惜しまないつもりです。

こうして、桜花塾生による新たな塾設立の動きは、一見桜花塾の分裂または弱体化を促すようにも見えますが、実はまちづくりの多様性を引き出し、かつ桜花塾がネットワークの核となつて町内住民の協力体制を強化していくものと確信しています。

#### ◆町外とのネットワーク

川内町だけでまちづくりを考えなくても「井の中の蛙」ではないでしょうか？

県外研修を行うにつれ、もっと町外とのネットワークを広げようということになり、今年の一月、丹原若者塾（TYC）へおじゃまして交流会を行いました。

彼らのまちづくりの取り組みを学ぶ中で、「身近な町でありながらこんなにも違うのか！」と痛感し、今年度よりも少し掘り下げた交流を試みよう、共同研究



第3回滑川ためとも祭り

グループ『CherryWay』を設立し、今年から始まった県の助成を受けて活動しています。

丹原町と川内町は桜三里を挟んで隣り合っているのに、現在双方の町の交流は皆無。

私達は、交流の復活を通して、お互いがまちづくりに切磋琢磨できないかと考えています。

今年八月には、川内町の塩ヶ森ふるさと公園でTYCのイベントノウハウ、アーチストとのネットワークをお借りし「塩ヶ森サンセットフォーク」を開催しました。TYCメンバーとの打ち合わせなどによる交流、アーチストとの出



塩ヶ森サンセットフォーク

会い、チケットを売り歩く中で出会った方々……。いろんなネットワークができたのではないかと思います。

しかし、それがネットワークだと言えるのかといえば疑問を感じます。

お互いに刺激材料・発奮材料として捉え、ともに学びともに教え合う、そんな関係を創りあげる必要があると思います。

そうした観点からも今後ますます両塾生同士の交流を行い、いつでも気軽に教え合い助け合えるネットワークづくりを進めて行きたいと考えています。



◆ ネットワークって

私自身、語学力には余り自身がなく「ネットワーク」という言葉  
を自分なりに「ネット」と「ワーク」

に分けて理解しています。本来は通信網のことを指すのですが、私は、網を使う生活、網を使った仕事と解釈してみることになりました。虫で例えるなら「クモ」、職業で例えるなら「漁師」が適当だろうと思っています。これは、両者とも網を使い、獲物を捕まえるということから想像したものです。ここで、二つのことが問題になってきます。一つは、網の大きさです。共に生活がかかっていますから小さくは当然網に掛かる量も少なくなり、生活を維持していくのは大変でしょう。そうすれば大きい網ということになります。網をつくるのに膨大な時間と労力が必要であり、つくり上げたからといって、大きな網をあやつることは大変な作業になるのでは



ないでしょうか。二つ目は、網の目です。例えば、自分の欲しい小さな獲物がいたとします。それを捕まえるのに、大きな目の網を使ったら逃げられてしまいます。また逆に、大きな獲物を捕まえるのに小さな目の網の必要もなく、大きな目の網で十分はずです。

ここで述べた二つのことから、網は獲物に応じて、大きさと網の目を考えなければならぬということになります。ネットワークにおいても、目的に応じて適当な大きさが大切であり、また、それを上手に活用する必要があると考えます。

◆ 坂本龍馬と河辺村

“龍馬は脱藩して大きくなった。河辺村は龍馬で大きくなる”を合言葉に河辺村では、坂本龍馬にあり、各種イベントの開催、龍



「坂本龍馬像」前にて

馬グッズの販売等を行っています。今年、「第六回全国龍馬ファンの集い」を当村で開催しました。北は北海道から南は九州の長崎県まで、全国の龍馬研究会会員の方をはじめ約百二十名の参加がありました。「エー！本家の高知県は分かるが、北海道から！秋田から！東京から！なんでこの愛媛の河辺村まで来るん？」これが、私の最初の言葉でした。龍馬と云えば、西郷隆盛と桂小五郎の仲を取り持ち、薩長同盟を結ばせ、江戸幕府を崩壊させた男として有名ですが、この時代に人と人とを結ばせる、今というネットワークづくりをしていった人物なのです。今回、

河辺村に全国の龍馬ファンが集まって来られたのも、その時代に龍馬とその土地の間に某かの縁があったのだろうと推測するとともに、龍馬のネットワークの広さに驚かされています。

### ✧私の思い…

私は、組織づくり、村おこしには『元氣』『勇氣』『やる氣』の三つの“氣”が必要だと考えています。そして、ネットワークづくりにはその“元氣なあいさつ”が必要だと思います。「おはよう」「おやすみ」「こんにちは」のいろいろなあいさつがあります。例



道の龍馬本坂こうで歩らじわ

私は、「KAI援隊」（仮称）というグループを結成すべく、只今、氣の合う仲間と酒を酌み交わしながら準備を進めています。KAI援隊、言わずと知れた坂本龍馬の海援隊からモジったもので、かわべの“KA”とアイデンティティ、インタレストの“I”を組み合わせたものです。キー

### ✧新しい風

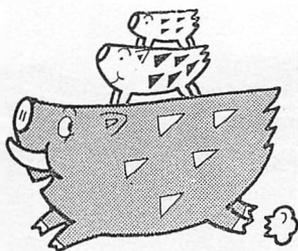
えば、見知らぬ人同士が出会った時に交わすあいさつは、ネットワークづくりの基本であり、その後のお互いの関係に大きな影響を与えることでしょう。そのあいさつが、元氣なものであることが大切です。そしてあいさつをすることは、当たり前のことですが、一つのあいさつから広がるネットワーク、この“あいさつ”こそが、組織づくり・村おこしの上で大切な要素であると思っています。

ワードは“酔う”という言葉に置き、キャッチフレーズは“河辺を知って、好いて、おもしろく”で決まり！河辺に酔いながら、酒に酔いながら、私達の河辺村を優しく、住みよくしたいというのがグループづくりの動機でした。そのためには、自己の研修に努めながら、自分の意見・アイデアを語り、行動しなければなりません。そして、もう一つ、協力するということ忘れてはいけないと思います。一人で何役もこなすことのできる人もいますが、協力することの大切さを忘れている人がいるのも事実です。皆で一緒に、物事を成し遂げたあと、充実感を味わい、感動を分かち合うためにも、この協力という姿勢を大切にしていきたいと考えています。何分にも急に思い立った事なので、何から始めていいのかわからないことばかりです。でも、河辺を“ナンバーワン”“オンリーワン”にしたい気持ちで「元氣」「勇氣」「やる氣」を呼び起こしてくれています。

隊では、結成準備段階で、仲間の意見を大切に、組織の長だけが名前を連ねるような実行委員会形態ではなく、実際に行動する仲間と構成する実践型の隊にしていきたいと思っています。私の夢は、まだまだ始まったばかりです。



大会カルタボジャンベかわ





八幡浜市商工会議所青年部が、昭和五十六年九月に設立し、記念すべき十年目の年平成三年は、八幡浜市が世界に誇る郷土の先覚者である二宮忠八翁が、ゴム動力飛

行実験に成功して、丁度百年目にあたりました。

これに際して、市内外の各種団体が、様々な記念事業を企画しました。その中で、当青年部は青年経済人として何をすべきかを検討し、事業を通じて会員のレベルアップや、地場産業の活性化を目指して、広く一般市民に二宮忠八翁をPRすることを目的に忠八翁事業企画会を設置しました。

それまで、八幡浜市は、「みかんと魚の町」というキャッチフレーズで町を売り出しておりましたが、さらに二宮忠八翁をクロージアアップさせることにより、八幡浜市の知名度が上がると共に、市活性化の切り札になると考えました。

特に、今回の企画活動の中で原



動力となったのは、漫画家の黒鉄ヒロシ先生に書いて頂いたシンボルマークであり、沢口敏夫先生のキャッチコピー「天才は忘れた頃に飛んでいた」は、全国に広くPRするには最高のものとなりました。

平成四年には、北九州で開催された、航空ショー並びに東京銀座TOTOパビリオンでの二宮忠八翁のPR、忠八グッズの即売会を実施、平成五年には、岡山ラジコンフライトショーに復元された「玉虫型飛行機」の展示を行いました。マスコミ等の宣伝効果もありますが「二宮忠八翁」・「八幡浜市」をご存じの方々が増え大変嬉しく思っています。

以上のように、二宮忠八翁を広くPRすることにより、八幡浜市をより多くの方々知ってもらうことを目的に、各種イベントに積極的に参加し続けましたが、会員の中から「イベント屋で終わってはいけない、今までに近隣市町村との交流は行ってきたが、飛ぶ・空の町」をキーワードに交流を考



「夢飛行」の際

えてみてはどうか」との意見が出されました。そして、模索・研究する中、今から二百年以上前の江戸時代、琉球王朝に仕える安里周当（あさとしゅうとう）という人物が、自作の羽ばたき機で空を飛び沖縄県南風原町の地元では、「飛び安里」という愛称で呼ばれていることを知りました。南風原町では、昭和六十二年、飛行二百周年を機会に顕彰事業に取り組み、復元機の製作、顕彰碑建設、古文書資料の収集等を進めるとともに「飛び安里」「ウルトラマン博物館」

(ウルトラマンの脚本家、金城哲夫氏の出身地)を今後の町づくりの拠点として位置付け、観光、特産品の製造に、行政、商工会、町民の方々が取り組んでおられます。

「百聞は一見にしかず」とりあえず行ってみようということになり、平成五年六月に約十名で訪問しました。地元の人との意見交換、地場産業の学習、復元機・顕彰碑見学等、観光旅行では味わうことのできない沖縄の歴史、文化に触れることができました。

互いに大空を目指した偉人を輩出した地域同士が、手を取り合っ



てやてやふれあい祭り

て全国に情報発信する話題作りとノウハウの交換、また、特産品の交流と、色々アイデアを出しながら息の長い交流を続けたいと、八月七日・八日に八幡浜市の新町商店街で、沖縄・八幡浜交流物産展を開催することになりました。

交流物産展当日は、南風原町から金城町長はじめ商工会会員約三十名が来浜し、沖縄名産の黒糖菓子、お酒(泡盛)、熱帯果樹の他、陶器、琉球かすりなどを展示し、又「飛び安里」展示コーナーや郷土料理実演コーナーも設置されました。そして、当市からは会議所青年部、二宮忠八翁事業企画会メンバーが参加して「二宮忠八翁」展示コーナーの設置や忠八グッズの販売を行いました。

てやてやふれあい祭り」と名づけて実施しました。

市内の農、水、商工関係者が連携して「地元産業の魅力を知ってもらおう」と企画し、その中に、沖縄物産展も加わって頂きました。百食用意した沖縄そばは、午前中で完売という盛況ぶりでした。また、今回は「将来を担う子供たちにお互いのまちを知ってもらおう」と小学生に初めて同行して頂きました。参加したのは同町内の四つの小学校の五・六年生二十名で、沖縄の伝統民謡「エイサー」や琉踊を披露して頂き、夜は地元江戸岡小学校の六年生と自己紹介やゲームを楽しみ、そのままその児童の家にホームステイして、八幡浜の家庭生活を肌で感じて頂きました。別際にはプレゼントの交換をして、「きつと手紙を書くからね、南風原町にも来て下さい」と名残りを惜しんでいる姿を見て、人的ネットワークの素晴らしさを感じました。

今年実施した、「はえばる94ふらさと博覧会」には、吉見市長、



TOTO銀座パビリオン前

堀田会頭にもご出席して頂き、「物的交流から人の交流、心の交流にしていきたい」とのコメントも頂きました。

日本ふるさと塾主宰の萩原茂裕氏が「まちおこしは足元の材料を時代に即して耕し直すこと」と言われるように、当青年部は、二宮忠八翁を核にして、様々な情報の発信源になれるよう、また、個性的で魅力ある地域づくりをする為に、多様な発想を持ち寄って、今後取り組んでいきたいと思えます。

まちづくりから見ること

# 「源五郎の降る村」

長野県飯田市

高橋寛治



私が住んでいる長野県飯田市では、むらづくりの姿を「集落複合経営」と呼び、各種の地域活動を展開してきました。

この「集落複合経営」は、市内下久堅・大原地区の皆さんが続けている地域経営の仕組みであり、これを市内全域に広めようとする運動につながっています。大原地区は①地域内の道路や圃場の管理は自分たちが行い、災害の時でも自分達で補修し原材料のみ市へ要

求する。つまり自分の地域は自分で管理をする②果樹園では農地の所有と利用を分離して、農地の利用効率を高め、これによって補助金の対象とならない果樹園の補助を「共同化の理論」によって得る③会社勤めの傍らりんごの栽培を始め、老後の設計をりんご栽培と年金で行うと考え、豊かな老後に対しての投資に手を付ける④どの專業農家にも若い後継者やお嫁さんがいて、また農家以外から嫁いで来ている⑤これら若い後継者は、JAからの請負耕作や地域主導のジャズコンサートを開催、また奥さんグループは農産品の加工などの地域活動を積極的に企画

している地域であった。

飯田市では、このような活動を市内各地に広めるため、地域の自主的な「むらづくり」を支援する事業として「地域マネージメント事業」を展開してきた。今回ご紹介するのは、この事業を受けた荻坪集落である。ここでは地域の活性化のために、集落の将来構想アンケートを取ったところ、要望の



集落複合経営 (大原地区)



人形劇カーニバル

大部分は市街地への道路の改修要求となってしまう。そのような外向きの顔はかりの論議が行き詰まったときに、私の荻坪通い……つまり、むらづくりへのお手伝いが始まった。

「役員会に出てくれる」との声がかかり、夜の七時半に地区の集会場に向いた。そこには役員八名が集まってくれた。役員会とは言え私はよそ者、最初の三十〜四十人は話がうまく噛み合わなかつ

たものの、地域の様子を少しずつ聞き出している内に、荻坪の河川はすべて集落内に水源を持ち他の地区からは入っていないことがわかってきた。「魚はおるの?」と私の問いに一人のお母さんが「おる おる……」と話したのが始まりで、フナやドジョウが沢山いて、捕まえる方法から子供の頃の思い出が次々と重なって話が広がってきた。

この「水」から始まった何でもない切っ掛けが「この集落には全部で二十戸しかないが、十一か所も溜池が有るに」となり、その現状や昆虫の様子に話が広がった。その中では「昔は冬場仕事として、溜池へ厚く氷が張ると、氷を切り出し、皆で背負って米川へ運び、繭の種を冷やすのに使い、夏まで残った氷はカキゴオリにして食べた」「氷切りの現場では、毎年だれかが作業中に溜池へ落ちこみ、大騒ぎをした」など、役員会に集まった三十代の人ですら知らない、楽しかった昔の作業が活き活きとよみがえってきた。

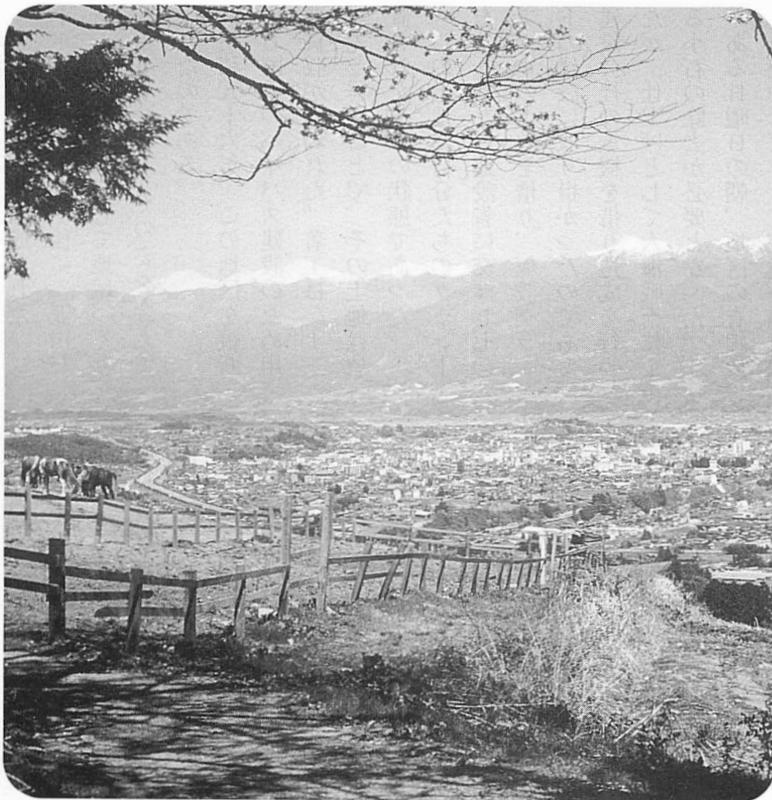
匠巻は地元代表者の篠田孝雄さんの「源五郎」の話であった。「夜の晩になると屋根の上からポンポンと音がするに……」と話が始まった。「何で?」「源五郎が降って来るんな」「なに……?」皆さんはわかりますか、篠田さんの話では「屋根がトタン葺きの家では、月夜には月がトタンに映るので、源五郎は溜池と間違えて飛び込んでくるんな……」とのことでした。思わず「ウソー」と言ってしまった。ところが「そうな」「そうな」と言う役員が大部分であった。驚くやらおかしいやらで、その後の会議は途端に話が砕けてスムーズに運ぶことが出来た。

お話ししたかったことは、「○調査」と肩肘張って調べるより、何でもない思い出話の中からひとりで「ほぞ」を導き出すことが、結果としてステキな情報に出合う糸口に繋がるのではないかということでした。

荻坪の皆さんは、この会議でワークシヨップによる「集落点検地図づくり」を行うことを決め、

正月十五日には午後一時半に集落の辻へ集まり、五、六人のグループに別れて点検マップを作ってくれました。終了後、地区全員でドンド焼き（小正月行事）が行われ、更に話が深まったようです。また、このマップを活用した「村」の再生活動も始まろうとしています。

地域に学ぶことは、楽しく、また大切な宝を知る機会につながるのではないだろうか。それも区長さんのような役員の人だけでなく、普通に生活している「普通の人の生活の知恵」が拾い出せれば、まちづくりのアイデアはさらに広がることと確信しています。



キラリ光るまち  
みんなてつくる  
住みよい  
むらを!

大分県三光村  
「竹馬会」事務局  
相良 卓紀



平成二年十二月三日、大分県三光村の名が全国に知れ渡る事件が起こった。

全国でも例がない「タイヤ火災」がそれである。一〇〇日間燃え続けたこの火災をマスコミが大きく取り上げ、新聞各紙はもちろん、各テレビ局も連日現場からの中継で大きく報道した。当時、タイヤ火災を持ち出せば三光村を知らない人はいないほどであった。

老万円札の里、福沢諭吉を生んだ大分県北部に位置する三光村は、四六・〇二㎡、一七〇〇世帯、五六〇〇人余りの小さな村である。

今、この三光村が再び全国の注目を浴びようとしている。平成元年、日本で初めて開催された「泥田バレーボール大会」がそれである。主催しているのは村内の地域のメンバーで組織する「竹馬会」というグループである。

今から十八年前の昭和五十一年、三光村ソフトボール連盟が発足し三光村大字佐知という二〇〇世帯、七五〇人余りの地域にも一つのチームが結成された。当時、村内には地域づくりグループなどなく、青年団も婦人会も衰退の一途をたどり崩壊寸前であった。唯一組織らしい組織と言えは消防団ぐらいのもので、地域行事や祭りを維持していくのがやっとであった。

しかし、この時結成されたソフトボールチームが、後に「泥田バレーボール」を通じて地域づくりグループとしてその姿を変えていったのである。

昭和五十六年、この地区を縦断する国道のバイパス建設のため用地買収が行われた。着工は二―三年先と言うことで、その土地は放置されたままの状態であった。

この土地に自分たちのグラウンドを造ろうと、建設省に交渉し七〇アールの土地を借り、仮設グラウンドの建設に取り掛かったのである。建設会社の重機を借り造成を行ったが、仕上げとして人海戦術による小石の除去が必要となった。

ある日曜日の朝、地区の有線放送を使ってグラウンド整備を地区の人々に呼びかけた。すると驚いたことに僅か二〇名足らずのソフトボールチームの呼びかけに、住民の半数の三〇〇―四〇〇人も人が参加してくれたのである。

自分たちの遊びで始めたソフトボールの練習のためのグラウンド造りに、これだけたくさんの方々の

人々が協力してくれたのである。このままでは申し訳ないと、その年の秋、三光村で初めての地区の大運動会を開催したのである。地域住民のほとんどが参加し、競技参加者は延べ千人を超える運動会となった。

このころからソフトボールには自信がないが、こうした活動には参加したいという人が現れ始めたのである。

自分たちで出来ることから始めようと、昭和六十二年三月ソフトボールチームから地域づくりグループ「竹馬会」を発足し、他のグループとの交流を盛んに行うようになったのである。

昭和六十三年秋、中津下毛地域（一市三町一村）の地域づくりグループの交流会で田圃の中でバレーボールをやったらと言う話が出た。焼酎を飲みながらの夜なべ談義の席であったため、竹馬会のメンバーの一人が、「よし、来年うちでやろう」と言ってしまった。その場はそれで終わったが年が明け、田植えの時期が近づくと「泥

田バレーボールはいつやるんですか」という問い合わせが集まり始めた。準備はおろかそんなことなどすっかり忘れてしまっていた。しかし、反響の大きさに開催せざるを得なくなり、メンバーで議論に議論を重ねた結果、日本初の「第一回泥田バレーボール大会」を平成元年七月三十日に開催することになったのである。

このユニークなイベントは、タイヤ火災以来のマスコミの取材を受けることになった。新聞各紙は言うに及ばずテレビでも全国ネットで報道された。

今では、全国各地で同じような大会が行われているようであるが、我々の「泥田バレーボール」が元祖であると自負している。

平成四年三月には同じようなイベントを行っている北海道深川市のグ



泥田バレーボール大会風景

ループのメンバーが視察のため本村を訪れ、その年の六月には竹馬会のメンバー十五人が深川市を訪ね交流を深めた。

こうした活動が認められ、今年の三月には三光村が自治大臣表彰を受賞するまでになったのである。

さらに今年の四月二十九・三十日に開催した第六回大会は、TB



第6回泥田バレーボール大会を終えて  
竹馬会メンバーとタレントチームの集合写真

が三光村を訪れ、しかも全国放送されるなど、初めてのことであり、会の活動にも拍車がかかった。

現在、竹馬会のメンバーは二〇代から七〇代の老若男女七〇人ほどである。それぞれが自分

の出来る範囲で活動している。もともとイベントが目的ではないが、結果として泥田バレーボールが有名になり、やめる訳にもいかず、年に一度の大きなイベントとして自分たちが楽しみながら開催している。

自分の住む町や村を良くするためには、自らの手でしなければ誰にも良くしてくれない。そして楽しくなければ続かない。

行事やイベントをただ消化するだけでは、そのうちに飽きがきて苦痛になってしまう。イベントを

するにも、自分たちが楽しまなければ継続は難しい。会の継続のためには組織そのものが楽しいものでなければならぬ。時には高齢者会員のために温泉に出掛けたり、子供たちと一緒に福岡ドームにプロ野球観戦に行ったりと、会員の家族ぐるみでのコミュニケーションを図ることを心掛けています。これも小さな地域であるからこそ出来ることかも知れない。

地域づくりは、家庭から地域、地域から市町村、市町村から県と小さな組織からの広がりが原点であると思う。行政が、行政レベルで地域づくりに取り組み、そのためには人材育成だと掛け声だけでは到底無理である。その手法を心得ているところは別であるが、ほとんどはそれがない。

数年後「全日本泥田バレーボール選手権大会」の開催を夢見ながら「みんなでつくりよう住み良いむらをも」を合言葉に、今後も竹馬会の活動を続けていきたいと思っている。

## 地域づくり西日本交流会議

### 宇和島大会に参加して

平成六年十月二十日（木）～二十一日（金）の二日間にあつて、国土庁・宇和島地区広域事務組合・関係市町村等の主催により、「地域づくり西日本交流会議宇和島大会」が、宇和島市と南北宇和郡八町村を会場にして、開催されました。この大会は、魅力ある地域づくり活動に取り組んでいる全国各地の人たちが集い、「地域の顔が、素敵に光る」をテーマに、雄大な自然、伝統的歴史文化等の、それぞれの地域固有の資源を活かした、個性的な地域づくりのための方策を探ろうと、開催されたものです。

総合研究開発機構理事永田尚久氏の「世界の顔が素敵に光る」と題した基調講演を皮切りに、事例発表、九市町村での分科会、パネルディスカッションによる全体会議等が、多くの参加者の熱気に包まれた中で行われました。

この中から私の参加した第六分

科会についてご報告いたします。

第六分科会は、農林漁業を基幹産業とし、豊かな自然に恵まれた津島町の現状を踏まえて、「若者定住の促進、高齢化社会への対応、地域文化の振興、自然環境の保護、地場産業の振興」等の課題について、活発な討議がなされた。この分科会では、主体的な住民活動の大切さを再認識するとともに、その活性化をいかに図るかに、焦点

が当てられたように思う。岩城忠津島町長は、行政の長という立場から「住民の智慧を借りながら、みんなが住みたくなる町を創りたい」という信念のもとに、埼玉県庄和町を例に、住民活動への金銭的援助、権限の委譲等の構想について話された。そして、ヘロン久保田雅子さんは、福祉活動の実践者としての立場から「ボランティア活動は、上から下への命令で行われるものではなく、住民一人ひとりが横のつながりを重視したネットワークを作り上げることが大切」と話され、コミュニケーションの重要性を訴えられた。また、

篠原重則さんは、学識者の立場から、高校生のふるさと意識調査で地元へ愛着を持っている者が多かつたことをあげ、「若者が定住する、活力ある地域づくりのために、地域を担う人材育成のための土壌づくりが重要」「人を育てるのは住民であり、きちんとした組織を作って活動することが大切」と話された。

地域が活性化していくための一つの条件として、生活レベルの向上が考えられる。そのために「産業振興」「インフラ整備」などの

経済性を重視した施策を繰り返してきた。しかし、そういった経済性や利便性にとられ過ぎると、ゆとりや安らぎといった、本来誰もが持っている豊かな感性の部分を見失ってしまう。今日、このこ

とへの反省の声が、社会的欲求として高まっている。これからは、都市部の人々が歩んできた道を、地方に生きる我々が同様に歩む必要はない。ふるさとを生きる意義を再確認することこそ、一番大切な事なのではないだろうか。住民

性や利便性にとられ過ぎると、ゆとりや安らぎといった、本来誰もが持っている豊かな感性の部分を見失ってしまう。今日、このこ

「西南地域は都市に迎合する必要はなく、また、するべきではない」  
壇上のコーディネーターやパネラーの方々のメッセージをこのように受け取ったのは、私だけだろうか。

どちらにしても、「地域の顔が素敵に光る」ために何が必要なのか、その方策を探る上で、非常に意義深い大会であつたと思う。

最後に、このような大会を主催して下さった関係者の方々にお礼申し上げるとともに、この大会が、西南地域をさらに魅力ある地域にする取り組みのきっかけとなることを祈りたい。

# 夢 創 造 未 来

## 「まちづくり」

### 草の根文化講演会

#### 魅力あるふるさとづくりを求めて！

当センターでは、地域に根ざした歴史や生活文化に裏打ちされたまちづくり活動の原点を探り、地域住民が一体となって進めるまちづくりの展開・方策などについての認識を新たにするとともに、個性的で独創的な活力と潤いのあるふるさとづくりを進めていくため、まちづくり先進地の実践者を講師に、『まちづくり草の根文化講演会』を開催しています。

今年度は、平成六年十月十八日(火)に、大洲市で同市と共催のもと講演会を開催し、地元をはじめ、近隣市町村からの参加者に加え、松山市しあわせづくり推進協議会の方々など多数の参加をいただきました。

講師には、岐阜県明智町、日本

大正村実行委員の橋本典明氏をお招きし「地域資源の再生と住民活動」と題してご講演していただきました。

ここで、その内容について所感を交えながら報告いたします。

#### 「地域資源の再生と住民活動」

『まちづくりの第一歩は、人と人とのコミュニケーションにある。それは、一方通行ではなくお互いが心を聞き理解しようとすることが重要である。例えば、知り合った人には、心を込め大きな声でありさつをする、これが新しい人間関係の始まりであり、まちづくりにとっても大切なことである。』と話されました。まちづくりは個人ではできない、皆で力を合わせ進めていくもの、そのためにも、

人と人とのふれあいを大切にしていく必要があるでしょう。

また、『お互いがお互いを心配しながら生活している、そんな町に住んでいることの喜びを自分の中で感じられるような地域を創っていくことが大切である。』とも言われました。

そして、『住民誰もが当たり前のことがやれる、何でも気兼ねなく話せる町、そういう町を創っていくことが必要である。何も特別なことをやる必要はない。楽しみながら、何か一つ自分でやってみてください。意識が変われば必ず行動が変わる。そして、行動が変われば地域が変わり町が変わる』と語られ、日本大正村での実践活動に裏打ちされた力強い言葉に参加者も聞き入っていたようでした。

#### 〈雑感〉

講師の橋本氏は、「まちづくりの第一歩は、人と人とのコミュニケーションにある」と強調されました。これは、人と人が出会えば言葉が交わす。そんな当たり前の

ことを、日常生活の中でできる人々がいる地域こそが輝いていくだろうし、人間関係を大切にすることが「まちづくりなんだ」ということを言われたのではないかと考えます。

やはり、まちづくりの手法として、それぞれの地域の先人たちが築いてきた風土や文化を見つめ、それを活かしていくことのできる人材を、地域住民がどう育てていくか、また、その環境をどうつくっていくかが、まちづくりの進展に多大な影響を与えていくのではないかと思います。

そして、このような視点で、自分のまち、生き方を見直していくことで、新しいふるさとの魅力、自分を発見できるものと考えます。最後に、この講演会を実施するにあたり、大洲市をはじめ関係者の方々にお礼を申し上げますとともに、参加された皆様の地域において、まちづくり活動を進めていく中で、何かの「ヒント」になれば幸いです。

(研究員 竹松 毅)



講演する  
橋本 典明氏

# 地域づくり交流研修 — 直島文化村から —

国立公園・備讃瀬戸に位置する直島の南部を中心とした周辺の四島を含め、約七十万坪の土地を昭和六十二年に取得し、その開発に着手した。この開発計画は「直島文化村構想」と名付けられた大プロジェクトである。

平成元年に安藤忠雄氏の監修により、「人と自然との出会い」をテーマに、単なるキャンプ場ではなく、子どもたちの創造と自己発見の場としてユニークなキャンプ場として「直島国際キャンプ場」を、また、平成三年には、同じく安藤氏の設計により、「自然と建築と芸術の融合」をテーマに、ア

今年の十一月八日から十一日までの四日間、「地域づくり交流研修」のため鳥取県智頭町、東伯町、日南町及び香川県直島町を訪問しました。メンバーは、県内各市町村や各種企業団体等の職員で、越智郡吉海町から南宇和郡西海町までの、総勢十四名です。今回は、その中から福武書店の直島文化村構想についてレポートします。

## ◎直島文化村構想

(株)福武書店は、人と自然との出会いから創出される新しい地方文化の創造を目的として、瀬戸内海

・ナウマンなどの作品が展示された現代美術館とホテルが一体となった施設「ベネッセハウス」をそれぞれオープンさせるなど、現在もプロジェクトは進行中である。福武書店の進める「直島文化村構想」は、全国各地で進められているリゾート計画とは一線を画している。単にレジャー地、保養地といったリゾート地ではなく、直

島という、海と山の両要素を持った豊かな自然環境を舞台として、その自然環境とマッチする諸施設の整備及びその運営により、創出される「くつろぐ」という状況をベースに、芸術文化を基軸として、様々な人々の出会いによって萌芽する人々の創造性を育てる場所としての位置付けがなされている。施設を利用する側が、そこでの楽しみ方、過ごし方を工夫することのできる「場」を提供するというコンセプトは、これまでの日本のリゾート開発には余り見られなかったものである。

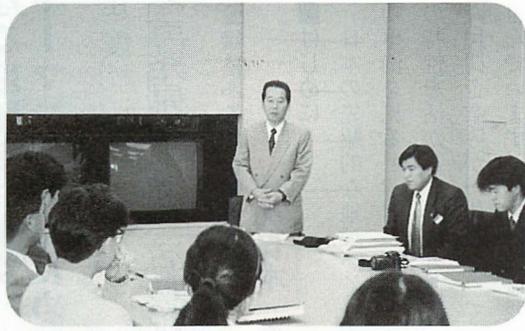
直島文化村は、福武書店と直島町の出会いによって誕生した。当時、福武書店は、社長自身が考える「創造の場」にふさわしいリゾートの候補地を、また、直島町は、町とともに真剣に、町のビジョンに沿った形で、某企業がリゾート開発から撤退した跡地を活用してくれる企業を求めている。直島文化村は、こうした両者の思いが結びついたものであり、何か運命的なものを感じた。



ベネッセハウス

## ◎ベネッセハウス

直島宮ノ浦港より約十分、海沿いの山の斜面を湾曲して走る小道を、美しい海岸線を眺望しながら車に揺られていると、山々の緑の中に違和感なく溶け込んだ不思議な建造物「ベネッセハウス」が姿を現わす。車を降りて、丁寧に大石を埋め込んだ、正面玄関へと続く白壁を通りぬける時、エーゲ海にでもいるような錯覚に



福武書店本社ビルにて (中央・福武社長)

陥りそうだが、「ベネッセハウス」は、自然との調和を意識して、外観はこじんまりとした感じで建てられているが、中に入るとかなり広い。フロントを抜けると、一階と地階との区別がつけられないような、上下左右に点在する大小様々な空間を、迷路のように結びあわせた現代美術館のスペースになる。こうした非現実的な空間の中で現代美術を鑑賞するとき、感性が研ぎ澄まされるような不思議な興奮を覚える。

また、二階と三階は客室になっ

ているが、アートギャラリーとは違って、落ち着いた雰囲気、テラスから瀬戸内海を一望することができる。「自然を満喫する」という言葉がピッタリのゆったりとしたスペースである。

建物それ自体が芸術とも言えるこの空間での、現代美術や、人との出会いは、今後の直島を十分に感じさせてくれるものであった。

### ◎まどろみの文化

直島文化村構想においては、現代の都市を中心とした文化を「緊張の文化」とし、自然の中でこそ生まれる「まどろみの文化」を提案している。都市の緊張と喧騒の中で生まれる現代の文化は、真の文化の一面でしかなく、真の文化は、人間のもっと根源的なところに根ざしているはずだというのである。

実際、勤務中の仕事机の上で散乱した書類を眺めながら、あるいは満員電車で体をゆがめて吊り革にへばりつきながら、人間は「創造する」ことができるだろうか。こんなことを考えるとき、創造す



直島国際キャンプ場にて、研修生一同

る場合は、東京などの大都市にではなく、創造するための時間的余裕と、自然環境に恵まれた地方にこそ、あるような気がする。

福武社長は、瀬戸内海の美しさを絶賛し、「ヨーロッパの友人は、瀬戸内海を見て、エーゲ海よりも美しいと言って感動していた」とまで言ってくれた。愛媛に住む私たちは、そのことをもっと認識すべきだとつくづく思った。直島文化村担当の村山氏の「運営方法がどうのこうの言っても、やはり一番大切なのは、この豊かな自然で

はないですか」という言葉が、今も心に残っている。

### ◎研修を終えて

今回の研修において、自然の中に溶け込んだような素晴らしい施設もさることながら、当日、研修生の間で深夜まで行われた活発なまちづくり論議を思い出すにつれ、「創造の場」としての特殊な空間の存在を認めざるを得なかった。

これから行政は、人々の交流の場、議論の場として有効な施設をもっと作っていく必要があるのではないかと思う。

また、私たちの住むふるさとが、私たちが考える以上に素晴らしい地域であることを認識するとともに、地域を生きたるこの意義をあらためて考えながら、今後のまちづくりを活かしていきたいと思う。最後になりましたが、ご多忙にもかかわらず、熱心に対応していただいた、福武社長をはじめ、訪問先の各担当者の方々に、誌面を借りまして心よりお礼申し上げます。

(主任研究員 中村博之)

# 新たな地域を目指す

## キーマン育成のために

平成六年度

### 「ふるさと再発見・創造塾」活動報告

愛媛県ふるさと整備課

久保本 宏志

#### ■はじめに

日本の先駆的な地域づくりの成功事例を見ると、どの事例も地域の特性を活かし、行政と住民、また民間企業等が一体となって取り組んでいます。そこには地域の実情を熟知した中心となる人物「キーマン」がいます。すなわち地域づくりは、「人づくり」からと言えると思います。

愛媛県には、こうした「人づくり」を目指した「地域おこし塾」が九十五を数え、全国でも有数の設置数を誇っています

こうした中、県ではふるさとづくりの積極的に取り組んでいるリーダーの方々に、より一層の視野を広め、今後の地域づくりに役立てていただくため、平成五年度から「ふるさと再発見・創造塾」

を開設しています。

今年度も昨年度に引き続き、県内の市町村から推薦された二十五名の塾生を対象に、県内研修、県外研修、公開講座の研修を実施しました。

まちづくり総合センターと県内七十市町村の共催により実施したこの塾の概要を、私なりの感想を交えながらご紹介します。

#### ■県内研修事業

この事業では、県内外の講師を招き、七月十九日から十月十五日までの四か月間に、五回八講義を実施し、ふるさとづくりの現状や課題、また、実際に地域づくりに取り組んだ体験談等を講義していただきました。塾生には、基礎と実践の両面から学んでもらうことにより、それぞれの地域と比較し、自分のまちの地域づくりについて考えていただけたものと思います。また、県内各地域から集まった塾生同志がお互いに交流を図りながら、テーマに基づくグループ討議も実施しました。

塾生のみなさんは、最初は緊張していたせいか、なかなか自分の考えを言えなかったようですが、

回を重ねるにつれ、今までの自分の活動を通しての地域づくり論等が積極的に出されるようになりました。

塾生はそれぞれに、各講義の先生方の提言やふるさとづくり論について考え、今後各地域でそれを参考に地域づくり活動を展開されることと思います。

#### ■県外研修

この事業は、全国のふるさとづくり先進地との交流研修を通じて、

より視野を広げてもらうため実施したものです。

今回は観光・リゾート開発や都市部との地域間交流事業に先駆的で、かつユニークな取り組みが行われている長野県を八月二日～五日の四日間の日程で訪問しました。

官民一体となつての町並み修景事業に取り組んでいる小布施町、地域資源・歴史遺産を核に村づくりを進めている和田村、人形劇カーニバルを通じての交流事業を積極的に取り組んでいる飯田市の三市町村を訪ね、ふるさとづくりのガイダンスをはじめ、ふるさとづくりに取り組むグループの方々と交流を実施しました。

私はこの研修で、三市町村とも地域づくりをするプロセスは違っても必ず「キーマン」となる人がいて、そこに住む人がその人を支え、本気で真剣に取り組んでいる姿勢が伺えたような気がします。

それとこの県外研修の意義を、塾生のひとつが「県外研修Ⅱ視察旅行」と思っていたそうです。『観光県』長野県でビジネスホ



県外研修 長野県和田村  
(和田宿本陣内で説明を受ける)

テルに泊って、先進地を視察し、ああ楽しかった』、こういう県外研修を想像していたのかもしれない。しかし、期待とは裏腹に「山の中の旅館」、町づくりのリーダーとの意見交換会と現地視察、夜は地元まちづくりグループとの交流会、更にその後の塾生同志による自由討議とあって、塾生も疲れた様子でした。

そうした三泊四日のハードスケジュールをこなしていくうちに、塾生も「本来の研修とは」「ああいうところを学ぼう」「あれよりもこちらのほうが」という気持ちに変わったように感じました。『目的意識を持って臨む研修の意義』を体験されたことと思います。

## ■ふるさと再発見・

### 創造フォーラム'94

ふるさとづくりは、キーとなる人がいて、それを支える地域の人（ふるさとづくりについてなんらかの形で携わっている人）が必要です。

こうしたことから、地域住民の



ふるさと再発見・創造フォーラム'94

皆さんに「地域づくり」について積極的な参加をしていただくため、公開講座として「ヒューマンネットワークで広がる新たな地域づくり」をテーマに、十一月十六日「ふるさと再発見・創造フォーラム'94」を開催しました。

当日は県内各地から地域づくりに熱心な方々、約三百人の参加をいただきました。

塾の総合アドバイザーであり、県内地域づくりリーダーの指導育成に当たっておられる讃岐幸治先生（愛媛大学教育学部教授）の進行で、鹿児島県牧園町むらおこし塾塾頭の田島健夫先生、北海道余

市町「志立波」代表の佐々木艶子先生、地元双海町で「21世紀ニューフロンティアグループ」代表の若松進一先生、以上三名の県内外のふるさとづくり実践者の方々にネットワークの必要性、意義や問題点について提言をいただく「ふるさとづくりリレートーク」とフォーラムに参加いただいた皆さんとの意見交換による「ふるさとづくり交流ステーション」を実施しました。

## ■おわりに

こうして、十一月十六日のフォーラムをもって「ふるさと再発見・創造塾」の研修過程をすべて修了し、昨年度に引き続き、新たな「地域づくりのキーマン」が誕生しました。

塾生の皆さんは、それぞれの地域で、この研修を通じてできたネットワークを活用し、個性ある「地域づくり」を進められることと思います。

私自身この塾を振り返ると、県内各地域のリーダーとなる人たち



修了式（新たな「地域づくりのキーマン」として期待される平成6年度塾生の皆さん）

と接し、意見交換をしていく中で、地域づくりの難しさを考えさせられました。それが同時に地域づくりに取り組んでおられる人の考え方、地域づくりとは何かを改めて学ぶことができました。そして、研修を通じてできたネットワークを大切にして、地域づくりに携わっていききたいと思います。

また、平成七年度も引き続き「ふるさと再発見・創造塾」塾生を募集する予定です。より多くの方の積極的な参加をお待ちしております。

# よしみさんの 『ひまわり日記』

川之江市

（「ひまわり号」を走らせる川之江実行委員会）

大西吉美



晴天に恵まれた、平成六年九月四日。今年も元氣良く『ひまわり号』が走りまわりました。

皆さんは『ひまわり号』についてご存じですか？

「今一番何がしたいですか」

「汽車に乗りたい」

ある障害を持った方がこう答えられたのが、今から十三年前のことでした。

それから十二年間。愛媛県でも年に一度、障害者とボランティアとの楽しい旅『ひまわり号』が走り続けています。乗り物は、列車になったり、バスになったり。

そして今年も、総勢四百余名を乗せた船『ひまわり号』が今治市沖へ向けて出航しました。

私がこの活動に参加して、早くも三年目を迎えています。実行委員として準備は大変ながら、当日、年に一度皆さんの笑顔に出会えると思うと、頑張れるので不思議です。

「何か役に立てれば」

これは、（私も含めて）参加される誰もが思っていることではないのでしょうか。

しかし、現実ではボランティアとして参加したものの、障害者を持った方に会った途端、戸惑っている人が非常に多いようです。でも、数時間後には、出会った時のお互いの心配そうな顔も、大きな笑い声となり、その内にボランティアという肩書きがなくなつて、「人と人」「友だち同士」が「皆



'94 フェリーの中で

んなで一緒に楽しむ姿」を見せてくれます。これが本当の『ひまわり号』の姿なのかもしれません。

ボランティアとは、「与える」「してあげる」ことなのでしょうが、私は、何か行動を起こす度に、「人としてどう生きて行くのか」「人としてどう生きて行くのか」たくさんさんの事を教わっているように思えてなりません。

最後に船内で、川之江・伊予三島の実行委員の皆さんと上演した手話劇の一部分を掲載させていただきます。

私も以前は、障害を持った方と出会うと、どうしていいかわから

ず、とても緊張していました。三年前のことです。私はA君と出会いました。A君は車椅子に乗っていました。しばらくしたある日、A君から一枚のはがきが届きました。

そこには、はがきいっぱいにかかれた『ありがとう』という文字がありました。私はA君が一生懸命書いた大きな文字を見て、胸がぎざぎざになりました。A君のはがきは、『生きています』『生きて行く』『』ということを、私にたくさんたくさん教えてくれたように思いました。それからの私は、不思議と素直な心で、誰とでも話せるようになりました。

一人ひとりの生き方は違っても、『人』は、お互い助け合いながら皆一緒に生きて行くものなのかもしれません。

さあ、皆さん！

たのしい旅の始まりです！

もしかすると、今日のひまわり号が終る頃、これまでのあなたとは少し違った自分自身に気付くかもしれませんよ。

# みかんとの暮らし

八幡浜市  
(真網代生活改善グループ)  
矢野クニ子



岸壁に、みかん摘女をどっと吐いて、島渡舟が旋回する。貸切りバス四台も、水田地帯より到着するや、たちまち里なまりの声が、しじまを破り、それぞれの迎えの車に乗って山に向かう。まるで交通ラッシュさながらの収穫期の一

日が始まる。

年々季節労働者の確保が困難になり、農家は苦心をしているようだ。

今年、市の協力もあって関西方面の大学から、アルバイト生を募集し、三十二名の男女学生を迎える事ができた。十一月二十日、農家との対面式もあり、私達改善グループも、農協の職員の方々と



共に郷土の牛料理を用意し、小学生は鼓笛隊で歓迎するなど、活

気に満ちた一時が過ぎる。また農業大学の学生も実習に訪れており、日頃は静かな集落も、この時ばかりは、豊かな賑わいを見せている。

私の住む真穴地域は、みかんが導入されて百年以上になる。昔は、半農・半漁の村であったが、今では、温州みかんの産地として、天

皇杯を受賞するなど、先人の功績は大きいものがあると思う。

宇和海に面した、リアス式の海岸から、山頂まで「石ころをひとつひとつ積み上げ耕した段々畑には、今を盛りに、みかんが黄金色に輝いている。青い海を背景に、人々は無心にみかんを摘む。島の端を真赤に染めて夕日が傾く頃、喧噪だった作業から解放される。

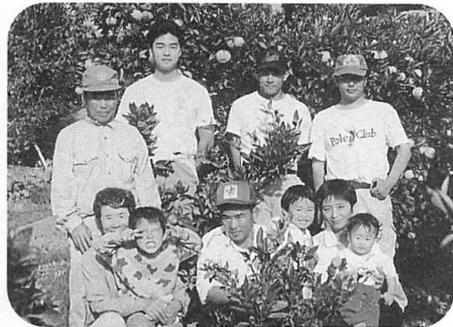
わが家も、沖繩と愛媛の農大生を実習に受け入れている。彼等の部屋では地元の後継者が訪れ、夜が更けるまで笑い声が絶えない。この雰囲気こそ、明日を担う後継者達の活力源になるのではないだろうか。この芽を大切に守り、育てていきたいと思う。

実習生と暮す二ヶ月間は、生活に張りがあり、「農」に対する熱意も高まって、晴れやかな気分させられる。

今年の春、みかんの花の香りを求めて、全国各地から集まった一行がある。国際婦人教育振興会の「女性指導者の海岸派遣事業」で、スペイン・モロッコに派遣された

メンバーである。今後の課題として、「先ず愛媛の花、みかんから交流を」ということとなり、市役所と真穴農協のご尽力を受け、マイクロバスで佐田岬半島や真穴のみかん山を巡った。山頂で炭をおこし、鱒を焼き、山海の珍味も盛り沢山。地元婦人達も、舌鼓を打ちながら、和気あいあいの一時を過ごした。

「来て、観て、味わって本当に良かった」「こんな旅は、今だから無かった」等、愛媛が初めての方が多かったにもかかわらず、この旅について、五感、六感胸打つ思いと、感激一人の言葉をいただいた。この地域に、美しい自然、手作りの味があり、打てば響く仲間達がいることを誇りに思った。初めて農体験に挑む学生さんからは、どんな答えが返ってくるのでしょうか。そんな新しい風を入れながら、少しでも住み良い地域づくりに挑戦してみたいと思います。



実習生と家族

リレーで  
ちょっと  
トーク

# 地域を生きる マイタウン マイフレンド。

大洲市 商工会議所青年部 中川義博



十一月二・三日の二日間、毎年行われる大洲祭と並行して、大洲浪漫祭が行われました。

赤煉瓦館と古い町並みが残る「おはなはん通り」を舞台として、大正時代をコンセプトに、時代衣装を着て、人力車が走り回り、大道芸がそこかしこで大声をあげていました。

二日間の浪漫祭は大成功に終わり、多くの市民の方々に、残っている古い町並みについてももう一度考えていただく機会にもなることができました。

この行事は、大洲市制四十周年のイベントとして、市からも多くの実行委員を出していただき、本来住民の主催するお祭りとは一味違ったものとなりましたが、市民

レベルでの町並み保存、また町づくりという意味で大きな波紋が広がりつつあり、来年もぜひ行いたいと小さなグループでの

討論が続く結果となっています。

さて私は、大洲商工会議所青年部に所属しており、町づくりを考える多くの仲間がいて、その仲間と一緒に討論を重ねてきました。

その中の一つに、不老庵茶室ライトアップがあります。大洲の名勝地となっております臥龍淵に、臥龍山荘不老庵茶室があり、鶴飼いコースの景観や、いもたき河原の背景にこの茶室をライトアップし、風情を楽しんでいたことが提案されましたが、なかなか理解してもらえず、仲間内で、六月一日の鶴飼いのセレモニーに合せ、器材を借りて多くの関係者の前でラ



「赤煉瓦館」前にて

イトアップを行うことにしました。もちろん趣意書、設置のお願いのチラシを直前に手渡しで配りアピールしました。

河原が夕闇に包まれ、川面にかがり火が映え、鶴飼い舟が下ってきて、今まさにクライマックスに差し掛かる頃、ライトアップにより山荘茶屋が浮かび上がると、あちらこちらの乗船客から感嘆の聲が沸き上がり、それを見守っていた私達でさえ、感動を覚えたものでした。

それからライトアップ設置の案が、トントントン拍子に進んだのは言うまでもありません。また今年はい



いもたき

関係機関から「いもたき」活性化案作りの依頼があり、いもたき初煮会のアイデアとシーズンを通しての活性化について、市民レベルの提言書を出させていただきました。

シーズン通しての活性化は、各団体への呼び掛けや、機構の見直し強化等、時間をかけて改善していかなければならないことが数多くありますが、いもたき初煮会は、大鍋による市民千名分のいもたき

提供や、儀式、仕掛け花火の実施、模擬店の出店、かがり火の集合、報道関係者からのPR等々、市民を巻き込んだのでアピールができたものと思っています。

最近、町の景観問題が盛んに言われていますが、看板規制の問題等で実際やりにくい面もあります。そこで私たちは、良いものをアピールするため、市民に問題提起をする方法を選択しました。

それは大洲の町並みにふさわしい、生け垣、構築物、建物等景観に関わる善行者の表彰を行うというものです。

「ふるさと大洲景観賞」と名づけて毎年四月の総会時に、来賓、会員の集まった会場で業績をたたえ、広く市民に呼び掛けていくものです。派手ではありませんが、町づくりを定着させるため地道に続けていきたいものです。

十一月二十日には、大洲市民会館にて、大洲まちづくりシンポジウムが開かれ、私も参加しました。テーマは、「住民のまちづくりへの参加意識の高揚」ということ



「おはなはん通り」にて

で、町づくり活動報告を中心に行われました。

づくり活動は、必要性があつて行ってきたことばかりの様な気がします。

ただ単にイベントとして考えれば一過性のもですが、続けてやろう、そしてどうすれば続けられるのか、と考える事が大切なことだと思います。

また、仲間を募ってみんなできする事を、あまり気負いせず、楽しみながらやっていければ、と考えています。

“多くの仲間をつくること！”これが町づくりの原点だと考えています。



風の便りから

## 四つのネットワークで生きる

えひめ地域づくり研究会議 代表運営委員

双海町

若松 進一



### 一、私に関わる四つのネットワーク

青年活動、公民館活動、むらおこし、まちづくり等、長年住民運動に携わってきた私にとって、アイディアと実践の源である人と情報のネットワークぐらい大切なものはないが、これまでに結ばれてきたネットワークを大まかに分けると、次の四つに大別され、そのネットワークによって生かされてきたし、これからも生きようと思っている。

#### ① 求心力的ネットワーク

求心力的ネットワークは、十五年前に溜まり場として設置、この



自立に向けて語り合うフロンティア塾



日本で一番海に近い下灘駅での夕焼けコンサート

十五年間に約一万人が訪ねてきた私設公民館「煙会所」や、青春塾・朱夏塾・白秋塾・玄冬塾を組み合わせ、十年間で四十回の学習会を目指し、廃屋を利用してもう十五回も続けている私塾「フロンティア塾」、わが町の実践的試みとしてすっかり有名になり、二千人を越える人が毎年集まる「夕焼けプラットホームコンサート」など、外から自分と自分の町に集まってくるネットワークである。

このネットワークの求心力が強ければ強いほど、個人やその町は素敵なものとなるが、自分と町に求心力をつけるためには、訪ねてみたい、逢ってみたいと思われる、

自分と町の個性溢れる存在感が必要である。

#### ② 遠心力的ネットワーク

遠心力的ネットワークは、自分が他人や他の町と関わるネットワークである。

何年前かに国立大洲青年の家で知り合った、大分県下の青年たちとの、大分を舞台にしたサポート的活動や、地道な地域づくりが高い評価を受けている、玉川町まちづくりグループ「源流」とのヒューマンなまちづくり研究活動、かつての青年運動や公民館活動をベースにした草の根の住民運動支援など、自分の持てる力や能力を請われるままに発揮するネットワークは、まだまだ未熟ながら、遠心力によって人々の心に力強くも温かいやる気をおこさせつつある。遠心力は広さと深さが求められるが、指導力とでもいうべき遠心力は、たゆまざる学びによって培われる。

#### ③ 手つなぎ的网络ネットワーク



全国の仲間とネットワークを広げる集会

手つなぎ(手放し)的ネットワークは、所属する組織の一員としてその役割を担うものだが、会員とリーダーでは存在や役割がおおずから異なっている。愛媛県内の地域づくり活動を(財)愛媛県まちづくり総合センターとともに支援したりリードする「えひめ地域づくり研究会議」や、無人島に挑む少年のつどいなどの新しいボランティア活動を積極的に追及する「二十一世紀えひめニューフロンティアグループ」、自己の探求とテーマ研究を続ける「夢工房」などの会員として活動するネットワークは、この指とまれ型の普通の

組織的ネットワークとして広く活用している。このネットワークは同志的性格が強く手つなぎだが、本来は会員ひとりひとりの手放しの自立がないと活性化したネットワークとはいえない。

#### ④相互交流ネットワーク

相互交流ネットワークは、お互いが一人の人間として影響を与え合うネットワークである一日に三枚のハガキを毎日書くプロセスの中で、百通の手紙を交換しながら交流を続けている和田修三氏(西土佐村)、煙会所の生き方に共感共鳴し、第二縁開所を設置して来る人拒まずの活動を続けているちろりん農園の西川文則氏(丹原町)、人間牧場や東京で市町村役場浪漫亭を経営する傍ら全国行脚を続ける鈴木繁夫氏、双海町にメダカ家を設置し、宇宙メダカですっかり有名になった川口壽雄氏(松山市)などの交流ネットワークは、お互いが新しい感性を磨き合うと共に、自己発見とでもいべき自己の潜在能力を引き出せる

事ができる。

#### 二、ネットワークを考える

客観的に自分や町を見つめ、自分と町の夢を描くことができる。これら四つのネットワークは、内と外から自分と町を磨き合いながら、知恵と行動のフットワークをつけてゆくと同時に、人と情報の検索能力を広げてゆくが、社会が広域化したり、便利になればなるほどネットワークの必要性は増してゆく。

しかし、ネットワークが重要だからと闇雲に広げても、多忙になったり浅くなり過ぎてネットワークが混線し、かえってマイナスと

なってしまうことが多い。私達は今まで、東京をキーにしたネットワークに価値観を置き過ぎたきらいがあり、地方からの発信、地方からの提案が求められている今こそ、そうしたネットワークの在り方を模索すべきであるし、異文化ギャップを感じるに足りる、異質なネットワークを構築して、目的意識や主体性を持ったキーマンとして成長すべきである。

ネットワークなしに地域づくりは成り立たないが、動脈的ネットワークと静脈的ネットワークをうまく組み合わせ、自分や町が輝く地域づくりを今後も実践してゆきたいと願っている。



日本一美しいふたみの夕日

# 媛のくにフラッシュ

産業の拠点と憩いの場  
「白坂交流館」  
オープン！  
朝倉村

朝倉村白坂ふるさと交流館（特産品センター）が、今年四月三日にオープンしました。同館は、当村古谷地区出身で東京在住の白坂巖氏のご寄付をいただいで建築したもので、ふるさと公園入口（朝倉下）にあり、物産品売場と和風レストランを備え、前方後円墳をイメージした木造の建物です。

また、展示コーナーを設け、「朝倉」の地名をもつ、市町村の特産品と地名パネルを展示し、全国の朝倉を紹介しています。

販売品としては、野菜、果物、花、農産加工品、菓子、タオル製品、焼物などがあります。

和風レストランは、地元で生産



された新鮮な野菜、隣接市で採れた豊富な魚等を材料に、美味しい料理を提供しています。

是非、一度お立ち寄り下さい。

※営業時間

・特産品売場午前九時～午後六時

・和風レストラン午前十時～午後八時

・休館日 毎週月曜日

※問い合わせ先

朝倉村役場産業課

☎ 0898 (56) 2500

宿泊施設  
「姫鶴平コテージ(山荘)」  
オープン！  
柳谷村

日本三大カルストの一つ四国カルスト、姫鶴平にコテージ(山荘)が五棟完成しました。

このコテージは、姫鶴平の標高一、三〇〇メートルの斜面を利用して建設し、前方に石鍾山系や大川嶺など雄大な風景が広がり、放牧牛の声で爽やかな朝を迎えることができます。また、バーベキューステージも併設しており、アウトドアでの食事も可能で、ファミリーやグループでのご利用に最適です。

建物は、木造二階建てで、各棟に台所、浴室、トイレ、和室、リビング、ベッドルーム、寝具、生活用具等を完備し、五人用三棟、七人用

二棟で長期滞在が可能です。

利用料金、五人用一泊(二万円)

八千円)、七人用一泊(二万円二千円)

で、利用期間は、毎年四月～十一月までです。

※予約申込先

姫鶴平コテージ(四月～十一月)

☎ 0892 (55) 0322

柳谷村産業開発公社

☎ 0892 (54) 2518

柳谷村役場 産業課

☎ 0892 (54) 2121

※問い合わせ先

柳谷村役場 産業課

☎ 0892 (54) 2121





開館以来、  
動く実物大の  
恐竜や参加型  
の体験装置、

平成六年十一月十一日、愛媛県総合科学博物館が、新居浜市にオープンしました。  
当博物館は、「自然館」「科学技術館」「産業館」の三つの常設展示室に、実物標本や可動模型等を展示し、愛媛の自然や科学技術などをわかりやすく紹介するとともに、国内最大の直径三十メートルのプラネタリウムも備えています。また、東予地域の生涯学習の拠点として、生涯学習の情報や機会を提供します。

“見つめる、感じる、楽しむ、  
科学との出会い”  
『愛媛県総合科学博物館』  
オープン！



また自然の星空のようなプラネタリウムが人気を呼んでおります。利用時間は午前九時から午後五時まで、料金は常設展示室及びプラネタリウムがそれぞれ高校生以上五〇〇円、小・中学生二五〇円。また、休館日は月曜日となっております。  
皆様方のご来館をお待ちしております。

※問い合わせ先

愛媛県総合科学博物館  
☎ 0897 (40) 4100

愛媛県歴史文化博物館が、東宇和郡宇和町の丘の上に、本年十一月十九日にオープンしました。  
本県初の本格的な歴史博物館で、全国有数の規模を誇っており、多様な展示を通じて愛媛の歴史や民俗をわかりやすく紹介するとともに、生涯学習の拠点として、さまざまな学習の機会を提供します。  
歴史の展示では、弥生時代の堅穴式住居や昭和初期の大街道など各時代の特徴的な建物や町並みを原寸大で復元し、時代の雰囲気や民衆の生活がうかがえるよう工夫しています。  
民俗の展示では、愛媛の暮らし、祭りや芸能、四国遍路など地域の

『愛媛県  
歴史文化博物館』  
オープン！



特色ある暮らしぶりを紹介しています。  
このほか、ホールや研修室、図書館などを備え、各種の講座や研修会を開催するとともに、施設の利用を受け付けております。  
休館日は、毎週月曜日と年末年始（十二月二十九日から一月五日）、展示室の観覧料は、大人五〇〇円、小・中学生が二五〇円となっております。

\*問い合わせ先

愛媛県歴史文化博物館  
☎ 0894 (62) 6222

## お知らせ

### 「えひめ地域づくり研究会議 '94年次フォーラム」開催 テーマ『21世紀への潮流とまちづくり』

- ◇とき 平成7年1月28日(土)  
◇ところ 松山市道後「にぎたつ会館」  
◇主催 えひめ地域づくり研究会議・(財)愛媛県まちづくり総合センター  
◇内容
- 12:30 受付  
13:30 開会
- 【第1部】  
13:40 「新えひめ地域づくり活動支援事業」活動報告集会  
14:40 「海への手紙事業」のさらなる発展を目指して
- 【第2部】  
15:20 公開討論会  
『21世紀への潮流とまちづくり』  
検証：これまでのまちづくり  
考証：これからのまちづくり  
「まちづくり200字の提言」
- 【第3部】  
18:00 交流会  
20:00 閉会
- ◇参加費 フォーラム 2,000円 交流会4,000円  
◇その他 申込み等、詳しいことは(財)愛媛県まちづくり総合センター内  
「えひめ地域づくり研究会議」事務局まで

## 投票日

1月22日(日)

## 愛媛県知事選挙

こぞって投票しましょう



新年あけましておめでとうございませう。一九九五年も無事幕明けし二十一世紀まで残すところあと五年となりました。長野冬季オリンピックにワールドカップ・etc。国際的行事がめじろおしです。なにはともあれ皆さんの町がより美しくより活性化することを願いつつこれからのまちづくりを担う者同士と手を取り合い頑張りましょう。:

\*\*\*\*\*

内容についてのご意見や活動内容についての記事など、お気軽にお寄せください。

「舞たうん」編集係

二人のMs。(中路・川原)まで

〒790 松山市三番町八丁目

一三四番地

愛媛県生活保健ビル三階

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

TEL 0899(32)7750

FAX 0899(32)7760

発行/平成七年一月一日

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

えひめ地域づくり研究会議